

令和2年度 学校関係者評価・第三者評価報告書

奈良学園小学校

本年度は、新型コロナウイルスに対する防疫対策もあり、学校関係者評価・第三者評価の機会を次のように複数回設けた。

I 学校関係者評価・第三者評価委員会(幼小中高合同)

令和3年2月 2日 9:00~12:00

II 地域関係者による学校関係者評価委員会(小学校)

令和3年2月10日 8:30~10:30

III PTA 関係者による学校関係者評価委員会(小学校)

令和3年2月 4日 9:30~11:30

それぞれにいただいた評価を次にまとめ、報告する。

I 学校関係者評価・第三者評価委員会

日 時：令和3年2月2日 9:00~12:00

場 所：大会議室

学校関係者・第三者評価委員 前田康二（奈良教育大学 教授）

出席者：古川教育総括監，安井中学校・高等学校長，梅田小学校長，谷川幼稚園園長

菅田高等学校教頭，小森小学校教頭

司 会：菅田教頭

記 録：小森教頭

1. 本学園の学校評価の経緯・教育システムについて（古川教育総括監）

幼稚園の3年間で土台を作り、その上の小・中・高を6-3-3ではなく4-4-4に分割するシステム。今の子どもたちの発達段階を鑑みて、小学校から中学校につなぐ際の「中1ギャップ」を少なくし、幼稚園から小学校へもスムーズに連携できるようにする教育システムとして取り組んでいる。（施設や園児児童生徒の現状について説明）

（前田先生）

非常によくわかった。校舎も4年ごとに区切ってあり、制服も4年で変わることで、子どもたちの意識はどうか。

（梅田校長）

PからMに進むことで、小学校に所属する感覚は変わらないが、中学校への出口があることに向けた準備という気持ちの上で変わり、いい意味での緊張感が持てるようになる。縦割り活動などを通して高学年としての役割を見せていくことで、自己肯定感を維持しながら学力を高めていくという気持ちにかわっていく。PのオープンスペースからMのセパレート教室になることで、いい意味で気持ちも変えられると感じている。

2. 小学校の英語教育について（梅田校長）

Pでは週2時間、M1・2では週3時間の授業を位置づけている。指導は日本人教員とALT1名ずつペアで行う。(実際のカリキュラムについて説明)

(前田先生)

1年生から時間数も確保して取り組んでいることから、フォニックスも時間をかけて体系的に指導していくとかなり効果があると思う。

音と綴りの関係を学ぶ上で、時間がないと音に十分に触れる前に綴りの指導にうつってしまう傾向が多い。そうすると、音を聞き分けて綴りと結びつけることが難しくなる。まずは英語の音をしっかりと聞き分ける経験を十分にさせることで、音を綴りにのせていく活動はとてもスムーズに行くのではないかと思う。

3. 授業参観 (M2B)

(前田先生)

参観したのが授業の冒頭部分だったので、よくある活動の天気や曜日などの問いに対し、子どもたちは完璧に答えていた。公立小学校ではなかなか難しい。今までの指導が積み上げられていると感じた。尋ねられた児童が順番に質問を作る活動も、答えることはできても質問を作ることは6年生でも難しいと思う。基本的な知識や技能は身につけていると感じた。全体的に大人しく感じたが、活動の仕方が変われば様子も違うと思う。

4. 中学校・高校の英語教育について (安井校長)

中学校1・2年生段階(M段階)においては、単語をかなり覚えさせる指導を行っている。あわせてリスニング・リーディングを重要視し、音を大事にした指導を実施している。発音を理屈で理解するのではなく、聞くことを大切にしている。(各学年の現状と今後の取り組み予定について説明)

(前田先生)

これから進めていく取り組みもあり、最終的なオーストラリアでのイメージも目標になれば、生徒の動機づけにもつながると思う。GCPが年間30時間で進むということだが、教育課程上の位置づけはどうなっているのか。

(安井校長)

中学3年生・高校1年生は英語の1時間で動かす予定。高校2年生は総合的な探究学習とタイアップして実施する。

5. 幼稚園の英語教育について (谷川園長)

毎週木曜日3学年2クラスずつを、小学校のALTに指導してもらっている。幼稚園では「英語に親しむ」「英語は楽しい」「苦手意識を持たせない」「夢や希望を持たせる」ことを大切にしている。そのため、歌や踊りなどの体験的な学びを中心に行っている。(具体的な取り組み内容について説明)

(前田先生)

週1回の英語の時間は、どの程度の時間指導するのか。

(谷川園長)

年長児では1時間程度。

(前田先生)

毎週打ち合わせをしながら中身を決めていくのか。ALTはどのような関わりか。

(谷川園長)

年間計画は決めているが、その時々によって内容を細かく調整している。

小学校のALTが来ている。毎週同じ先生が来るので、子どもたちも親しみを持って学べる。ハロウィンの時などは、小学校に行ったり、高校生にお菓子をもらったりといった取り組みも行っている。

6. 授業参観 (P1B)

(前田先生)

ALTが音を1つ1つ意識させていて、動作と音と連動させていた。子どもたちも動作だけや音だけにならず、一人一人が発音していた。しっかり習得していると思う。名前もローマ字で書かせていたのにも驚いた。四線の使い方は慣れていない部分もあると思うが、書くことに対してはこれだけ慣れているのだと思った。

7. 学校経営方針と自己評価について

(1) 幼稚園 (谷川園長)

現在、5年間の計画を策定中。志願者増に向けた取り組みを充実させることも重要。外国の文化などは、IVの「特色あるカリキュラム」に含んでいる。幼稚園から高校までつながっていることが、特色のある取り組みにもかかわっている。幼稚園の特徴は、マーチング活動の取り組み。保護者にも外部の方にもよい評価をいただいている。劇遊び発表も特色のある活動の一つ。一つ一つの活動に自信を持たせることを大切にしている。また、棚田やビオトープなどの自然が豊かな環境で、園児が虫や植物と触れ合いながら自然に働きかける生活ができる。そこからの様々な発見を、幼稚園にある本を通じて深めていけるような環境整備を心掛けている。(園児の実態・教職員の状況について説明)

(2) 小学校 (梅田校長)

建学の精神や校訓はキャンパス共通。スローガンに挙げたのは、今の時期に子どもたちが確かにつけないといけな力を表したもの。戦略分野は6項目。Iは広報、VIは安全安心、Vは指導力、IIは学力に関わるもの。(戦略分野の行動目標について説明)

(3) 中学校・高校 (安井校長)

「子どもの伸び率日本一」というスローガンで取り組んでいる。伸び率の対象となるのは、テストで測れる学力もあれば、非認知的な能力もある。子どもたちや保護者が6年間で伸びたことを実感できるような取り組みを進めていこうとしている。(生徒の学力層や付けていきたい力、取り組みの具体について説明)

8. ご助言等 (前田先生)

外国語の習得において着目すべき点は、いかに英語の力をつけていくか。1つは認知的側面。知識をどう身に付けていくか。たくさん聞いたり読んだりして、たくさん書いたり話したりしないと

いけないのは大前提。カリキュラムが充実しているので、小学校段階からできるだけ多くのインプットがあるとよい。今日の1年生の授業でも、大切なところを焦点化して行われていた。アウトプットの活動においても、能力が高いのでどんどんさせたいくなるが、むしろあまり急がせすぎなくてよいと思う。フォニックスでも大事なものは、英語の特徴ある音をしっかり認識することに集中するとよい。書く活動はもう少し少なくてもよいと思う。アウトプットを急がせすぎない。

6年生の授業では、基礎基本がきちっと身に付いていると思った。恥ずかしさから言えない様子も見られた。語学習得で大事な認知的側面とあわせ、情意的な面も重要視しないといけない。「話したい」「書きたい」という行動につながる動機づけが大切であり、どうやってそれを高めるかが大切だと思って見せていただいた。コミュニケーションをする意欲を行動にもっていくためには、次の点が重要である。

①コミュニケーションできる自信

十分に練習をして、人前でしゃべっても大丈夫と思えるように、練習により自信をつけさせておく。今日の授業はテンポよく進んでいたのについていけていたが、日本語に比べるとどうしても緊張感が高くなる。ランダムに当てるより、ペアや友だち同士とするほうが自分から言葉を発しようとするのではないか。

②相手と話したいという気持ち

今日の6年生の授業では、質問する相手が決まっていない段階で質問を考えることになっていた。表現の練習という意味ではよいが、誰に話しかけているのかという相手がいないことがポイントとなっていた。相手が明確で、どんなことを聞きたい、伝えたいというのがはっきりしていると「話したい」という行為が生まれる。

動機という意味では、最近よく「ビジョン」という言葉が使われる。こうなりたい、こんな風に伝えたいという思いを映像化できるかどうか、動機づけには大事だといわれている。中学校・高校でコンテストをしているとあったが、上手な発表を聞いたときに、自分もこんな風になりたいという「ビジョン」を持つことも重要である。そういった点をより意識した教育内容になればよいと思う。最終的なオーストラリア留学時の状況をイメージし、最終的にはこういうふうになれるようにというものを下級生が見ることで、何年後かの自分の姿が見えるようになればいいのではないか。最終的な到達点を可視化し、教員や子どもたちと共有できればよい。

また、学び合いや交流も大切だと感じた。高校生になったらこれぐらいのことができるというのを示すのも有効である。英語の学習はスパイラルで積み上げていくことが多い。同じようなテーマでの学びの中で、校種を超えた生徒間同士の交流（例：中学生や高校生が、小学生の道案内の学びをセッティングする）なども意味のある活動だと思う。12年あるいは15年のカリキュラムがさらにダイナミックに動くとよいと感じた。

高校生になるとどうしても受験が気になるが、今年度の大学共通テストに見られるように、求められる力は刻々と変わっていく。具体的にどんな力が必要なのかをかみ砕いて、目標共有をしていくことが大切である。

(前田先生)

子どもたちは授業で仕込まれていると感じた。4-4-4と6-3-3がどういう風に折り合いをつけながら進んでいるのかを追々見させていただきたいと思う。

Ⅱ 地域関係者による学校関係者評価委員会

1. 学校関係者評価実施日 …令和3年2月10日 8:30～10:30

はじめに、今年度の取り組みに関する概要の報告を行った。あわせて、学校経営計画および奈良学園小学校中期計画をお渡しした。その後、地震防火避難訓練の様子をご覧いただき、授業参観をしていただく中で、主に登下校の安全面を中心とした今年度の取り組みに対するご意見を求めた。

2. 評価者名 …天野イザベル文子（本校スクールガード）

3. 評価結果

【大項目】

I 教育活動に関するもの

【中項目】

（2）教科指導

- ・英語の授業を見たときに、スピーチを聞く側がひやかしたりからかったりせず、内容をしっかりと聞こうという姿勢だったので、スピーチする子も話しやすそうだと感じた。

（5）人権教育

- ・地域で障害を持っている成人の方がおられる。子どもたちと接する場面が出てきた場合、言動から不審者と判断されないか、不安に思っておられるご家庭がある。
→人権について、コロナ禍のこともありいつも以上に重ねて指導している。何か必要なことがあれば学校にも情報を提供していただければと考えている。

【大項目】

Ⅱ 学校経営に関するもの

【中項目】

（3）安全管理

- ・避難訓練には全員真剣に取り組んでいてよかった。
- ・登校時には、安全を見守りながら一人一人の伝えたい思いに耳を傾けるようにしている。子どもとの信頼関係を大切にするように心がけ、会話を通して子どもの変化に気づくようにしている。
→学校でも、担任だけではなくいろいろな教員が子どもの思いをキャッチできるようにしている。
- ・不審者発生時の対応について懸念される。交通量の多いスポットに保護者の見守りや先生方が立つことにより、人の少なくなる場所が減り、結果として不審者の抑止にもつながる。パトカーによる巡回も定期的にしていただけるため、安心感につながっている。
- ・見守り活動が浸透することにより、子どもたちが地域の方や警察の巡回の方に、自然にあいさつができるようになるのは非常によいことだと思う。
→パトカーによる巡回や近隣保育園前の横断歩道での安全指導などは、奈良西署に依頼して対応いただいている。正門前の交差点におけるガード設置も、学校と地域住民の方と協議会等の団体からの要望として伝え、担当部署が集まって凝議した結果、設置に至った。

Ⅲ PTA 関係者による学校関係者評価委員会

1. 学校関係者評価実施日 …令和3年2月4日 9:30～11:30

はじめに、休校期間中や分散登校期間中も含めた今年度の取り組みに関して、概要の報告を行った。あわせて、今年度前期アンケート分析結果および後期アンケート集計結果をお渡しした。その後、実際の授業の様子をご覧いただいたのちに、本校の今年度の取り組みに対するご意見を求めた。

2. 評価者名 …山本晴美, 川口優加子 (PTA 関係者)

3. 評価結果

【大項目】

I 教育活動に関するもの

【中項目】

(1) 教育目標・教育計画

- ・小学校では様々な工夫をこらし、時代の変化に応じた新しい取り組みをしてくれている。
- ・その一方で、昔から大事にされている読書や辞書引きなども続けていただいているので、これからも続けてほしい。
- ・今回の新型コロナウイルス感染拡大防止体制においても、小中高で連携をとって行っていた。
→それぞれの校種にあわせての対応を考えながら、常に連携をとっていた。それ以外にも、今年度は授業交流週間を設け、小中高の教員がそれぞれの授業を参観し、意見交流をする機会を持った。今後もよい形で続けていきたい。

(2) 教科指導

- ・ICT が普及しても、書くことはやはり大切である。便利なものがあるからそれだけを使う、というのではなく、鉛筆を使つての書く指導など、今後も基礎基本をしっかり押さえた上での便利さを大切にしてほしい。以前の取り組みと比べると、書く経験や機会が少なくなっているように思う。
- ・公立校でも教科担当制の導入が言われ始めたが、いち早くMからの教科担当制を導入していたのは評価できる。公立校と比較し、本校では今後どのように発展させていくか。
→P3からまとめテストの計画表を作成してM1・2からは考査の計画を計画的に立案するなど、自主的に学習に臨む姿勢を身につけること、教員が教科担当者間での連携を今以上にしっかりとっていきたいと考えている。
- ・公立校では学校から配布されたタブレットを使っているが、本校ではタブレットを個人で購入するのか、という声を聞いた。また、家庭でどのような使い方をするのか、どう説明をすればよいかと心配という声も聞いた。
→個人購入をすることで、活用の幅の広がりや自分のものとしてより親しみを持って大切に扱うことなど、利点があると考え。家庭での活用方法やルールについても、学校から子どもたちにしっかり説明できるように準備している。

(6) 生徒指導

- ・子どもが家庭でロイロノートを使っている際、ロイロノートからYoutubeにつながるがあった。
→そのことがわかった時点で、すぐに対応した。これから ICT 機器がどんどん普及し、必要不可欠

なツールとなるので、情報に関するモラルを子どもにも保護者にも伝えていく必要がある。今年度ご好評をいただいた zoom を用いた講演会なども、積極的に行っていきたい。

【大項目】

Ⅱ 学校経営に関するもの

【中項目】

(1) 組織運営

- ・新型コロナウイルス感染状況が今後拡大すれば、教員のテレワーク推進なども考慮してほしい。先生方の体調も心配だ。

(3) 安全管理

- ・スクールバスの便数や運行コースに変更や減便の案内があったが、次年度以降どうなるのか。
→先日改めてご案内をした通り、高の原コースは変更なし。祝園コースは経路を一部変更して維持できることとなった。祝園コース利用保護者には、2月末の参観時に説明会を行う予定。

(5) 地域等との連携

- ・今年はコロナ禍で担任発表も Youtube で行ったが、次年度以降も継続してほしい。